



それははるか遠く

ドラゴンクエストウォーク
ジャンピエ×男主人公
全年齢同人誌

「じゃ、俺は農場の手伝いに行ってくるから。ジャンピエはゆつくりしてくれ。無理はしないでくれよ」

ベッドから身を起こしたばかりのオレに微笑みながら、その男は手際良くブーツを履いている。

「……お前も気をつけるんだぞ」

こちらが返事をする、軽く頷いて、少しばかりの荷物を持って出て行った。

「もう二週間になるのか」

小さな村の片隅、狭い家に男二人で肩を寄せ合う奇妙な生活は不思議なほどに安定してきた。かつては、女神の天命を受けた者として、導きの英雄のもとに集い世界中を旅した四人——そのうち二人の。いざ、天命を果たさんと魔王城へと乗り込む直

前にオレは深傷を負い、あるうことか置き去りにされてしまったのだ。いや違う。導きの英雄は、命尽き果てるかもしれないオレを、あの男に託したのだ。ジャンピエを頼む、と。そして、魔王城へ導きの英雄と賢者が乗り込んだその瞬間に、魔王城はいずこかへかき消えてしまった。

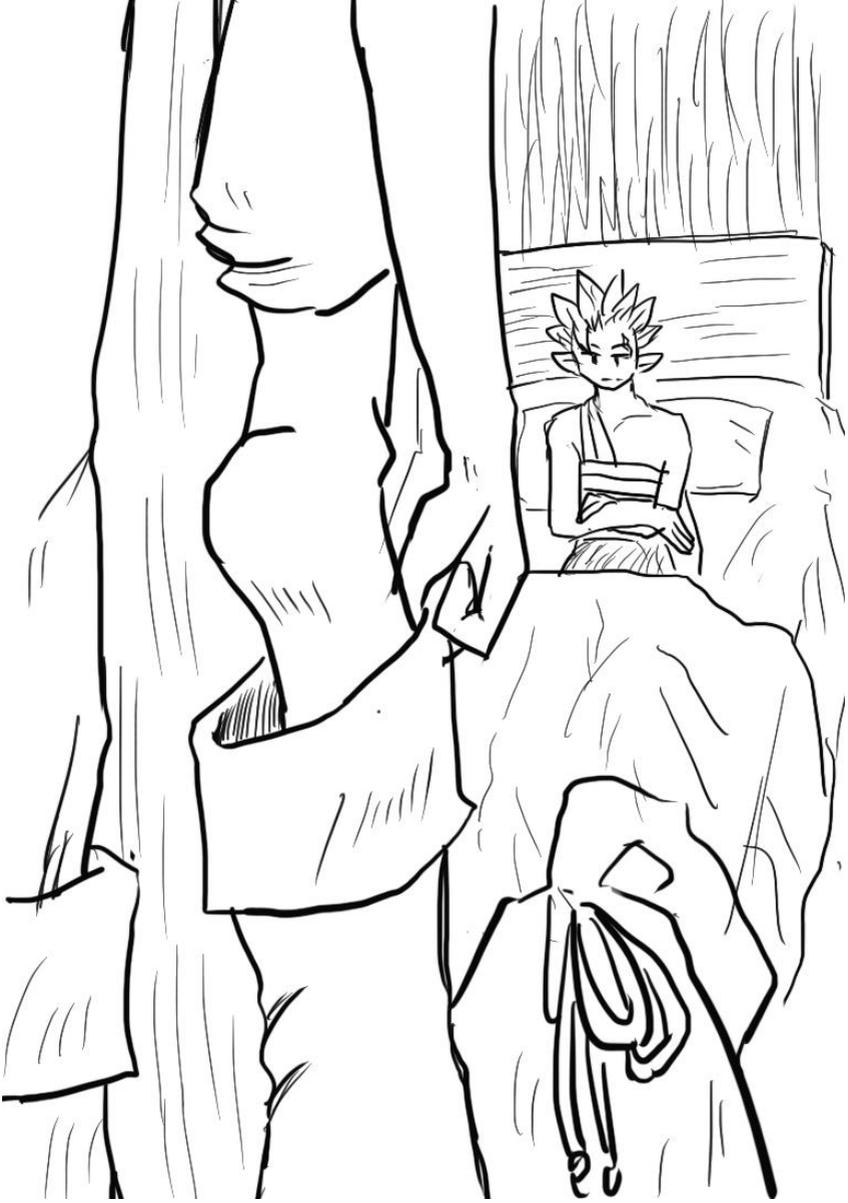
「大丈夫、二人はきつと帰ってくる。一緒に待っていよう」

そう言ってオレに肩を貸し、村を見つめるまで励ましながら歩き、今も傷が癒えないままのオレを生かし続けてくれているのが、共に暮らすあの男だ。かつては魔物の猛攻からこの身で庇うこともあった仲間が、今はオレを守っている。

「これが奇妙でなくてなんだというんだ」

居心地の悪さを覚えて、そろそろ元のよ
うに身体が動かないかと期待するが、ベッド
から立つと身体中が痛み、手足もうまく動
かすことができない。のろのろと立ち上が
り、食卓について水を飲むだけでも一苦労
だ。

いつしか、食卓に突っ伏して眠ってしまっ
た。



「ただいま。今日はりんごを分けてもらったんだ。久しぶりの果物だけど、悪くなっちゃいけないから食後に出してしまおうよ」

朗らかに話す声で目が覚めた。農場の手伝いで分けてもらったのだろう野菜を手際良くスープにして、パンを切り分けている。早く立ち直れと檄を飛ばすでもなく、これは貸しだ、などとおどけるでもなく、ただ毎日村の誰かの頼み事を聞くために家を出て、日々の糧を得て戻り、共に食卓を囲む。

「——お前は」

「うん？」

昔からそうだったな、と続けると、何の話をしているのかわかってないようにまばたきをしてオレの目を覗き込んでくる。

「自分の美徳すらわからんのか。相当なお人好しで、周りみんなの頼み事を断らないで……不覚をとったオレなんぞのことも面倒を見る。導きの英雄に任されたからといって」

いらぬことを喋りすぎた、と言葉を止めてふと相手を見ると、先ほどの朗らかさとは一転して、曇り空のような顔をしていた。

「違うよ」

オレのそばに来たその男は、目を伏せたまま言った。

「俺はもう、ジャンピエから、大切な仲間を奪わせたくない……一人にしたくないだけなんだ」

重くて、しっかりとした声だけど、涙の混じった声だった。



オレはかつて仲間たちの前で、失った故郷の話をしたことがあった。それは、オレを庇って死んだ女騎士ラムシーの話でもあった。

ラムシーはオレと戦えたことを誇りに思う、と言いつつ、そのまま死んでしまった。女神からの天命が与えられたあとも、心の中にはいつも「故郷の仇を討つ」こと、そして「ラムシーが誇るにふさわしい騎士でいる」ことが残り続けていた。

だからこそ、魔王城へ乗り込まんとする時、このまま命尽き果てても構わないと思っていた。今ですら、仲間の温情で生かされ続けるくらいならあの時に、と思うこともあった。

「いろいろと思うこともあるのだろうけど、腐らないでいてくれよ。最近、魔物が出てきたって話、ぴたりと聞かないんだ。これっ

て、英雄とパーシルが魔王を封印できたってことじゃないのかな」

「お前、それは」

「つまり、二人はどこかで生きている。そうだが、元気になったら、一緒に二人を探しに行こう。俺はそうしたい。ジャンピエは？」

目の前のお人好しはすっかりその気らしい。けれど、あれほど各地を脅かしていた魔物がぱたりと姿を見せなくなったのなら、きっと二人がやり遂げてくれたのだ。

「オレも同じ意見だ。うまくやったのなら労いの言葉の一つもかけてやりたいし、なんなら四人揃って祝杯を上げるのもいいな」

「よかった。じゃ、まずは……」

「歩けるようにならないとな」

それからの毎日は、ただ生き残った次の日を繰り返すものではなくなっていた。はじめはベッドから立ち、家の端から端まで——今となつてはやはり狭い家、なのだが、台所を指し、次に浴室まで、といった感じで身体を軋ませながら歩いた距離は恐ろしく長かった。痛みだけでなく、思う通りに動けないことにも苛立ちがあったが、それでも繰り返せばましな動きになっていくものだ。短くても歩けばいつしか距離が伸び、ふらつくこともなくなつた。そのたびに一緒に暮らすあいつと喜びを分かち合った。そして、身体も不自由なく動くようになってから、二人を探す旅に出るのと、もう一つの望みを持つようになった。

元の通りに戦えるのかを試したい。

あいつには隠れて、使い慣れていた棍——魔狼牙に見立てた箒で型だけでもと何度か試していた。自分では問題がないと思えるところまでできたけれど、こういったことは実践的にやらないと意味があるものでもない……が

「結局は、オレが納得したいだけかもな」
全て言い訳なのかもしれない。魔物のいない世界にも暴漢はいるのだから備えが必要だとか、いろいろと理由を並べることができると、結局あいつにハッキリと「ただ守られるのはこれで終わりだ」と示したいというのが本音なんだろう。そう、かつて世界中を旅した時と同じように背中を預け合い、時にはあいつを背に庇う力強い騎士としてそばにいたい。長らく仲間の庇護下におかれたことが感じさせる焦りなのだろうが、それ

にしては悪い心地ではないことが不思議でもある。

「ただいま。収穫の後に保存食づくりも手伝っていたら、すっかり遅くなってしまった。ジャンピエはもう何か食べたのかな」

「ばたばたと帰ってきた同居人の質問には答えず、オレは今日一日考え続けた問いを投げかける。

「お前、近々空いている日はいつだ？」

「えっ、えーと、明日は何も頼まれていないな」

「なら、明日はオレと手合わせを頼む」

部屋の片隅には、すっかり埃をかぶった魔狼牙と、それに寄り添うように細身の装飾的な剣が立てかけられていた。



まだまだ強い日差しの中、涼しい風が吹き抜けて野の草を揺らしている。村の外れに広がる草原で、オレはともに暮らす男と互いの力を試し合っていた。

オレが棍に見立てた箒で突けばひらりと身をおかし、こいつが剣に見立てた木の枝でなぎ払うのを箒で受ける。並の戦士よりは腕に覚えのあるオレだが、こいつの剣術はさらにすごい。深傷を負ったオレのために天命を諦めてくれ、と言われて首を縦に振るよ。うなお人好しではあるが、ひとたび剣を持つては目つきが鋭くなる。

「身体はすっかり良くなったみたいだな、ジャンピエ」

「ふっ、お前も腑抜けてはいないようだ」

オレも向こうも自分からは仕掛けなくなり声もかけあうが、これで休みにしよう

いうわけではなかった。互いに、相手を探るような手は出し尽くし……そして、先に動いたのはやはり剣士の方だった。

「残念だったな」

戦う上で守りに重きを置くことを信条としてきたオレには、こいつの狙った場所も、どう受ければ勢いを逃がせるのかもはっきりと読めていた。そして、当てが外れたと隙だらけのこいつに一撃をたたみかける。

「ダーククライ！」

思わず叫んだそれは、かつて魔狼牙から繰り出した必殺の一撃の名だ。込めた力で周りの空気が一瞬止まり、流れが変わる。そして、不意を突かれて尻餅をついてしまった剣士の喉を突く寸前でびたりと止めた。「……さすがだな。油断したわけではないだけ」

「当たり前だ。油断などされていてたまるものか。オレは、お前を——」

オレはかつての勤を完全に取り戻したからな、と返すつもりだったが、唐突な言葉が口をついた。その続きは何だ、と胸の内を探ったがぴたりと嵌るものは見つからない。打ち負かしたい？見返したい？驚かせたい？どれもぴんとは来なかった。

紡げる言葉も持たず目の前の男を見下ろしていたが、そのままにしておきたくなくて手を差し伸べると、こいつはしっかりと手を握って起き上がってきた。そうしてそのまま、オレの目を覗き込む。

「ありがたい、俺といっしょに旅をしたいと思ってくれたから……こんなに一生涯命治してくれただよな」

いつかの時のように、涙で震える声だった。そして目を伏せたまま、睫毛を震わせて続ける。

「俺はね、ジャンピエが好きだ。ずっと好きだ。黙っていたかったけど、こんな隠し事をしたまま一緒に旅をするなんて、俺は、俺は……」

こいつ、何てことを言うんだ！思わず口から出かかったが、それは言わずにいられた。この男が哀れだからではなく、オレ自身が居心地悪く感じていないからで、いや、むしろ、これは、さっきの唐突な言葉の続きにぴたりと嵌る。

「想われることすら煩わしいというなら、俺はどこか遠くへ行く。だからどうか、はつきり」と

一気に喋り終えようとするのを遮りたくて、何か言うより早く抱きしめる。かつての自分を取り戻すまでの間、いちばん近くで喜びも苦しみも分かち合い、弱いオレですら見守りながら共に暮らしてきた男が、遠くへ行ってしまうように。

「何を言うんだ。オレを一人にしたくないと言ってくれただろう」

優しく、しかししっかりと、オレの背中に手が回される。

思えば、ラムシーに庇われて生き延び、導きの英雄から置き去りにされて生き延び、そのたびになぜオレは大切なものを守り切らせてもらえないのかと悔やんでばかりだった。けれど、今この瞬間に全てが溶けていった。悔やんでも悔やまなくても、皆から与

えられた時間を精一杯生きることしか、オレにはできないんだ。

「これからの時間は、お前と共に歩んでいきたい。構わないか？」

うん、うん、と幸せそうに頷く姿が愛おしかった。



「ジャンピエももうすっかり元通りだし、これで来週には旅に出られるな」

「明日にでも出発するのではないのか？」

家に戻るなり旅の荷物を作っていたので、もちろん一日でも早く二人を探すものどばかり思ったオレはすっかり拍子抜けしてしまった。

「うん……そうしたいんだけど、農場の人たちにはしばらく手伝うって約束してたから。いきなり明日から来ないってわけにもいかないよ。あと」

「どうした」

「俺、もう一つ、大事なこと言っただけだ」

いまさら何を言っても驚くものか、と笑いながら促したが、いつもは優しげな顔から翳りは消えない。

「あの、俺、もしかしたら突然いなくなっちゃうかも——」

また妙なことを、と思ったが、それはかつて導きの英雄から伝えられた「一つの可能性」の話だった。このお人好し——オレと想い合う大切な仲間は、どこか別の世界の人間なのだ。そして、こいつの住む世界とオレたちの住む世界が何らかの力で交わった結果こうして過ごしているだけで、またいつか世界の交わりが元に戻れば別々の世界へと戻り、互いの記憶から互いが消えてしまうかもしれない、ということらしかった。

「そんな突飛な話があるものか」

「普通はそうだろうけど、俺、そもそもなんでここに来たのが分からなくて。気づいたら出会いの森にいて、そうしていたらみんなが拾ってくれて。だけど、こんなこと話し

ても、不安にさせてしまうだけだろう？だから誰にもこの話をするつもりはなかったんだ。けど、けど——ジャンピエは俺にとって、いちばん大切な人になったんだから、黙っていたくなかった」

この話は真実なのか。いや、オレにとってはそれはどちらでもよく、目の前で「得体の知れない別れの恐怖」に怯える男をただ守ってやりたかった。

「なら、いつそれが来ても悔やまないように、少しでも長くそばにいればいい。せつかく想い合っていると分かったんだからな」

「ジャンピエ、ありがとう」

「心配するな、これから二人で旅をして、英雄とパーシルを見つけた後でも、オレたちは一緒だ」

「うん、そうだな、離れない」

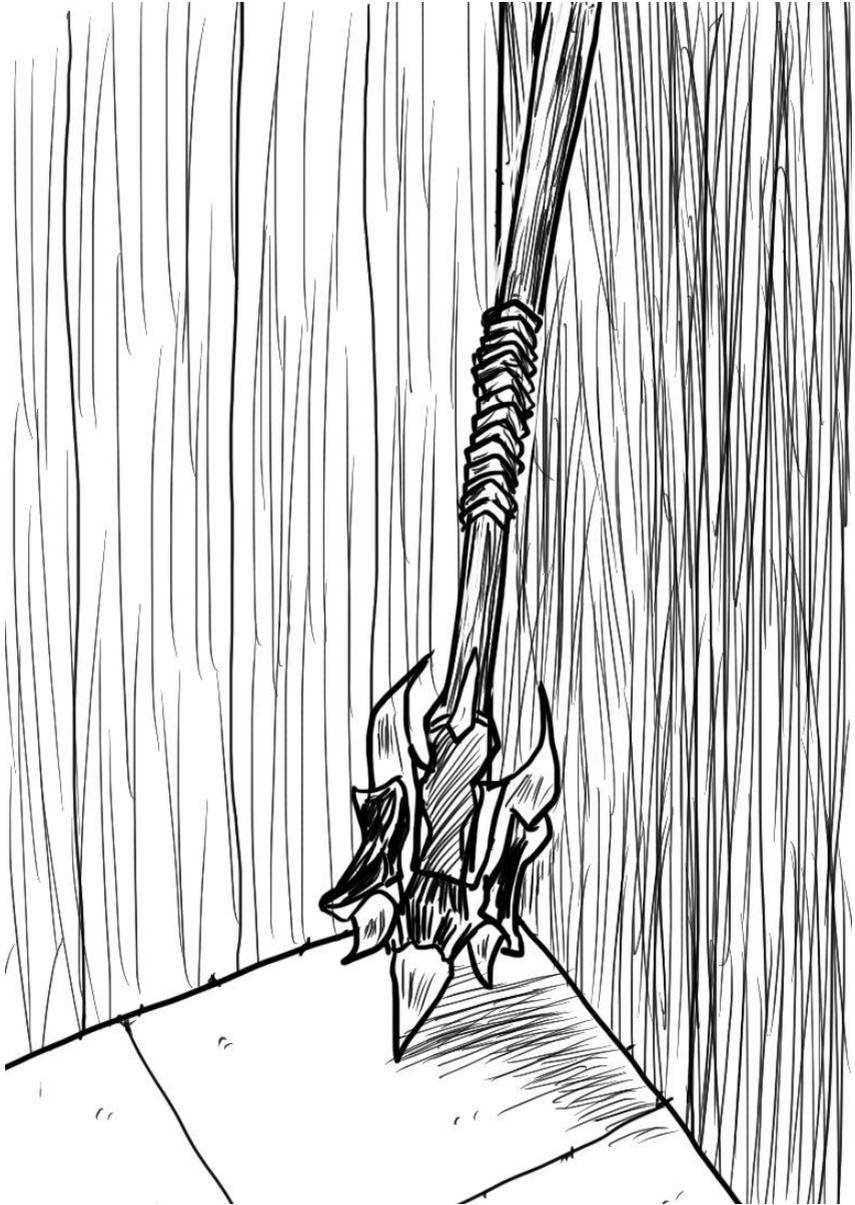
そうして、その夜は二人で同じベッドで眠った。まだ夏の気配の残る夜だったが、愛する男の温もりが心地よかった。



朝の日差しがまぶたを通して入り込み、オレは目を覚ました。昨日までと同じように、ベッドから立ち上がり、朝食を用意しようとするに立つ。昨晩はまとわりつくような暑さを感じたが、それにしてもよく寝付けたらしい。狭い家は男一人の暮らしにはちようどよく、手を伸ばせば必要なものにすぐ届くような距離感のため、傷を負った身体でも過ごしやすかった。

部屋の片隅には魔狼牙がただ一本で立っかけてある。それが目に入ると、なぜだか今日にでもここを出ると決めたことを思い出した。そうだ、身体の調子も万全になったからだ。
「さて、傷も癒えた。そろそろここを出るとするか」

そうしてオレは、その日のうちに荷物をまとめ、特に思い入れることのない小さな村の片隅の、小さな家を出て行った。なぜだか、共に世界を旅した二人の仲間が、きっと生きているような気がしたからだ。



あとがき

まず何よりも、お手にとっていただき、そして最後までお読みいただきありがとうございました。

昨年9月の1周年記念クエストを終えた段階で既に「手負いのジャンピエを託されたからには、行く先々で人助けしてる主人公が世話を焼いてないわけがない」と自分の中ではこのお話の流れはできていました。ではなぜ2周年記念イベント真っ最中の今（ですよね？9月20日刊行ですものね？）本にしたのかということ……



イベントで本を出して、同じ可能性を感じた人に届けられれば良いなと思ったからです。

なので本文では「だいたいの人が不都合なく読めるように」主人公の容姿や名前について言及しないことにしました。

※ただ挿絵だけは開き直って自分のとこの主人公（←）に…。

もしよければtwitterの

@ne_cotteまで感想をお願いします。

2021.8.23 ネコット

発行元:みずさばべっこう
<https://mizubeko.booth.pm>
発行者:ネコット
連絡先:https://twitter.com/ne_cotte/
発行年月日:2021年9月20日

同じ思いのどなたかに捧ぐ本です